

佳作

たかちゃん、すごいね

鹿児島県 鹿児島市立春山小学校三年 福元 愛渚

あせがひたいからふきだしてきます。太陽がギラギラてりつけ、道ろからは、ゆげが出ているようです。

わたしは、大きな町を初めておとずれました。どこへ行っても、人、人、人。四方八方からおしよせる人のなみをすりぬけながら歩きました。交通手段は、電車。ホームも人があふれていました。ただ、かごしまとちがい、次から次へ電車がやってきます。電車が、ホームへ着くと、長いれつの人々がわれ先にぎせきにかけてこみます。まるで、いすとりゲームみたいです。

暑さと人の多さでつかれていたわたしの目には、空いていたぎせきが光って見えました。「やった。さあ、すわるぞ」とすわろうとしたしゅん間、わたしのふたごのたかちゃんが大きな声を出して、わたし

しをひっぱりました。

「だめだよ、まなちゃん。そのせきは、ゆう先せきだよ。」

「ぼくは、ゆう先せきにはすわらないよ。そこは、体のふじゆうな人やおなかの大きい人がすわる場所なんだよ。」

と、言いました。お母さんを見ると、そのマークに気がつかなかったのでしょうか。お母さんもほっとした顔をしていました。わたしは、まわりをながめました。たかちゃんの声が聞こえたかもしれないのに、ゆう先せきには大人の人や高校生らしき人たちがそしらぬ顔ですわっていました。スマホをながめたり、目をつぶったりしている人もいました。「みんなすわっているのに」と、わたしの目にはうらやましくうつりました。たかちゃんは、すずしい顔をして、ゆれる電車のつりかわにせいっぱいせのびをしてぶら下がり、まどの外をながめています。お母さんは、小さな声で言いました。

「たかちゃん、えらかったね。よく気がついたね。」
そっとそっと頭をなでていました。

わたしは、三年生の一学期に国語でマークの学習をしたことを思い出しました。たかちゃんは、マー

クが大すきです。マークの本をよく読んでいて、わたしが知らないマークもたくさん知っています。そんなたかちゃんだから、ゆう先せきにもすぐ気がついたのでしょうか。

世の中には、たくさんマークがあります。それは、わたしたちの生活をよりべんりにしてくれます。漢字が読めなくても、マークを見ると分かることがあります。大事なことは、そのマークを理かいし、行動することです。「思いやり」は目に見えませんが、せきをゆずることはゆうきのいることです。でも、ゆう先せきにすわらないことは、わたしにもできることです。そのことを教えてくれたたかちゃんは、すごいです。

「じぶんにできる思いやりからはじめよう」と考えたたびにになりました。